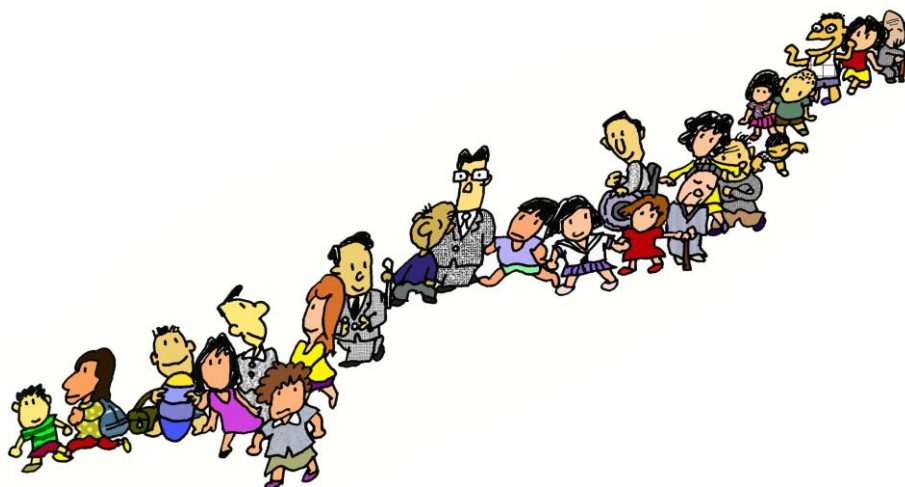


Family

History

(3)

団士郎／団いどむ



2021年、新年早々の1月2日、ファミリーヒストリーのフィールドワークに出かけた。私の祖父、團留吉(旧姓/矢澤)の生家を訪ねたのである。「三重県阿山郡阿山村玉滝・・・」、と私の幼い頃からの記憶にある場所は、現在、伊賀市に合併されている。

連載三回目は留吉が大津に出て奉公し始めてからの事が多く登場する。一度、三重の祖父の実家を訪問してみようと、調査員(いどむ)から誘われていた。しかし例によって、なかなか自分では腰を上げない私が今回動いたのは、妻が亡くなった正月は本当に簡素で、おせちもなく雑煮もなく、静かに原稿を仕上げてばかりいたので、いい気分転換だった。

大昔、私が小学校低学年の頃、国鉄・東海道線で草津まで行き、草津線に乗り換えて貴生川まで行って、そこからバスで信楽に行ったのだと思う。その後どうたどったのか分からないが、阿山村玉

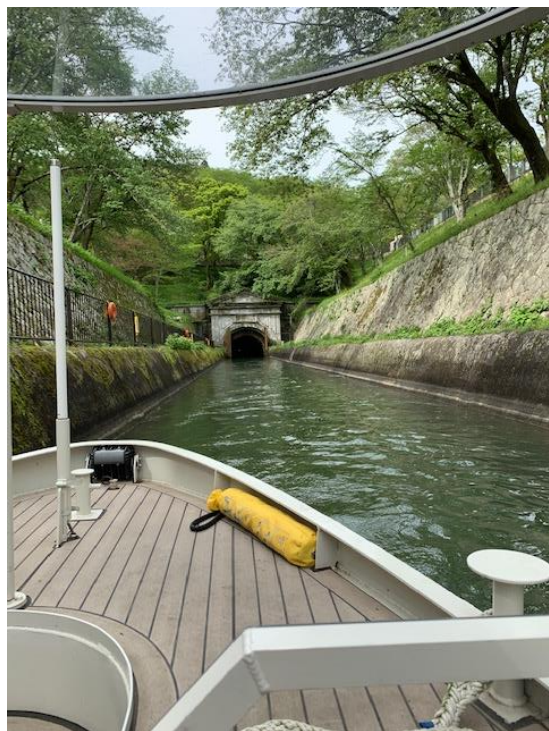
滝の祖父の生家を訪問したような気がする。というのも、信楽の狸の焼き物の膨大な露天陳列が子どもの私にはあまりにも強烈な印象で、そこしか記憶に残っていない。

その後、私の代はまったく交流なく、父(五士郎)が生前、矢澤家と年賀状のやりとりをしていたことを、今日の訪問で思い出すことになった。

このあと、近くにある東海道の宿場町だった「関宿」を訪れた(三重県亀山市関町木崎)。時代劇のセットのように残された、道幅の細い街並みは江戸時代の雰囲気。コロナの正月に訪れている人も僅かだったが、良い旅気分になれた。

「私の祖父(留吉)は、大津の西田さんという方の店(運送屋西利商店)で、丁稚の頃からお世話になっていた」と前号で書いた。

当時の運送屋仕事に若狭から京都に荷を運ぶ仕事があった。陸路は鯖街道が有名だ。水運に利用されていたのが琵琶湖疎水。ご存知の方も多いだろうが、これは明治維新後の京都復活の切り札として、琵琶湖の水を京都へ繋ぐ水路として建設したもので、飲料、水運、水力、灌漑に活かそうと未曾有の大土木工事をを行ったもので、鎖国の江戸時代から、明治の近代国家へと歩み出した建造物だ。



私が育った大津・三井寺地区にある長等小学校は、当時本校舎と北校舎に分れていた。二つ

の校地の間を運河(琵琶湖疎水)が流れていて、トンネル入口部分にあたる。

万が一にも落水したりすると直ぐトンネルに入ってしまうので、石垣部分上の土手斜面のカラタチの生け垣内部分には、とても厳しく立ち入りを禁止されていた。

ここから長いトンネルを抜けた水路は、いったん京都・山科で表に出る。そして再びトンネルに入るまでの沿道は桜の名所である。



春、散る花は水路一面を埋め尽くす。桜の花びらの絨毯がトンネルに吸い込まれていく素晴らしくも不思議な景色である。そして水路は京都蹴上の京都浄水場エリアに到着する。



滋賀と京都では、確か四〇メートル余りの標高差がある。ここを超緩勾配（琵琶湖と蹴上船溜りインクライン上部の水位差約4メートル。約8キロの距離を平均2000分の一）で、ゆっくり流れてきた運河の水は、ここでもまだ京都市内・鴨川の流れる標高との間に、35メートル余の高低差を持ったままである。

当時、アメリカの土木技術を学びに出向いた若き技術者・田邊朔郎は、ここに明治の土木遺産として今も残る三つのものを作り上げた。

一つはレンガ作りのアーチ型トンネルを含む長い水路である。難工事に莫大な予算とエネルギーが注ぎ込まれた。



二つ目は今もレンガ作りの建物が蹴上の三叉路に残されているが、水の到着点と市街地の落差を利用した日本初の水力発電所の建設である。

そして三つ目は、そこで得た電力を動力に変えて運行された蹴上インクラインと呼ばれる船専用のケーブル鉄道である。



1891年から1948年まで、五〇年以上実用されていたという優れたものである。高所の船溜まりに到着した船と荷物は、台車に載せられ、写真のように高低差約35メートルの斜面を下る船溜りまでゆっくり短いケーブルカーで降ろされる。



そして京都市内と同じレベルの運河に到着した荷を積んだ船が市内水路をゆくことになる。



一方、大量の流れ着いた水は、同じ高さの場所に作られた蹴上浄水場に送られる。この水位が市内全域への配水力なのだろう。

むろん流れてきた水すべてが浄水場で受け入れられるわけではなく、一部は水力発電に利用され、残余の水は鴨川に流される。このためにゆっくり流れ込む運河ルートが確保されなければならない。

それが名刹南禅寺の境内にある水道橋のようなレンガ作りの南禅寺水路閣である。琵琶湖疎水関連の建築物の中で、観光名所として一番有名かもしれない。子どもの頃、初めて見たときの印象は今も鮮明だ。京都の古い寺の境内にアーチ橋である。

ここからしばらく先にある運河沿いの桜並木が哲学の道と呼ばれている。運河は更に北に流れ、やがて鴨川に合流する。

長々とこの話を書いているのは、私が京滋の風景の中でも、格別に琵琶湖疎水への思いが強いからだ。そこには祖父・留吉の仕事人生が深く関わっている。

船下り

2019年春、我が家は一家で、大津三井寺下から、京都蹴上までの船旅をした。昭和24年(1949)以降、水運路としては使われなくなっていたものが、観光事業として2018年に再開され、一部で人気になっているものだ。

65年前、私が通っていた長等小学校の前が船の出発する水門である。当時、通学時に目にしていたこの場所は、京都市水道局の管理地として閉じられていた。(京都市民の飲料水としては、今に至るまで利用されている)

ここでやっとファミリーヒストリーである。運送屋の丁稚だった祖父・留吉はこの船の船頭をしていた。

大津の運送屋の蔵から米や海産物(若狭から山を越え、琵琶湖北部の海津港から船で大津に運ばれたもの)を京都に運搬していた。

往路は緩やかな流れの下りである。積み荷一杯の船も操船していれば蹴上に着いたのだろう。しかし荷下ろしした後の帰路は大変である。空になった船にロープをかけ、疎水の側道を船頭達が引っ張って大津まで歩いて戻ったのである。

そんな厳しさ、苦しさも含んだ祖父の思い出の労働現場を家族で辿ってみたい、そう思ったのだ。

もっとも、私以外にこんなに熱く語る家族はいない。孫達にはゆっくりすぎ、何も出てこない「カリブの海賊」みたいな船旅だ。でも、経験させておきたかった。

このツアーはJTBが取り扱っていて、便数も少なく、一艘に十二人が定員なので、募集と共に予約は埋まるような話だった。

しかし私としては、約百年後の今、団一家で揃って下りたい希望があった。申込書類に次男(いどむ)は、そんな事情を縷々書き添えて一家11人での乗船を希望した。

すると定員十二名の貸し切り対応でよければ、チャーター便として受付が可能な便もあると知らせてくれた。乗船料一人5000円×十二人分(定

員)に+チャーター料金が発生する、なかなかの散財だったが、希なチャンスだとみんなで乗船した。



結果的にではあるが、これが妻・典子の子、孫と揃って出かけた最後の旅になった。当時、誰もそんなことは考えたこともなかったわけだが、後日の医師の話では、胃がんの早期発見から言えば、2019年のこの時期でも早いとは言えないとのこと。検診などでの早期発見というのは、もう一年前2018年でなければならなかっただろうとの事だった。

(現在、この乗船チケットは京都市のふるさと納税の返礼品になっている。私は使ったことがないので知らないが、地下鉄車内広告ポスターで見かける)

三重の山奥から西利商店に丁稚奉公に出てきた留吉と、若狭小浜から大津に出て、西利商店と同業の運送屋を営んでいた團家とは、血縁的繋がりはない。

最初にも書いたが、「團家は土族の出だ！」と言いたがるのを私がつまらないと思うのは、こんな血筋への無理矢理なこだわりだ。

小浜から父親(規作)に送り出された團雄太郎は大津で結婚して、一人息子の硬嗣を授かった。

ところがこの息子が二十歳で亡くなってしまう。その翌年には、雄太郎の父・規作も亡くなった。僅か二年で、團の姓を名乗る者が雄太郎ひとりになってしまったのである。

跡取りがいなくなったしまった團家は、同じ小浜藩士の小泉家に嫁いでいた雄太郎の実姉の三女・田鶴(雄太郎の姪)を養女に迎える。

ここに婿養子として迎えたのが西利商店で働いていた真面目な留吉である。祖父は三重県阿山郡から尋常小学校の途中で丁稚奉公に出されてきた百姓の四男である。当時、子沢山の農村では、もういいのにまた子が生まれたというと、「留吉」だの「すて」などと名付けていた。もっとも、この三年後には妹となる五女が生まれているので、名前通りには留まらなかったようだ。

士族意識

祖父母は、百姓の四男と、土族の家系、團家の血筋から養子になった夫婦である。そこに男女二人の子が授かった。当時の家族としては子どもの少ない一家だろう。病気など様々な理由で子どもが亡くなることも希ではなかった時代である。

特に私の父・五士郎(いつしろう)は跡取り長男として父母から溺愛されたようだ。姉(ユカ子)はいずれ嫁に行くのだから、團家の中心は五士郎だった。

五士郎が育った時代、團家は現在の浜大津辺りの琵琶湖岸に米倉庫が並ぶ運送屋だった。運送用に運河が整備された琵琶湖岸と倉庫が遊び場だったと聞く。この当時の地図が歴史資料館に残されているし、当時の写真も資料として保存されている。男子ひとり長男として五士郎は育つ。

養女・婿養子に至るのは團家が跡取り息子を亡くしているからだ。そこに生まれた跡取りの五士郎には格別の思いがあっただろう。

しかしそれは三重の山奥から出てきた留吉の息子ではなく、土族の血をひく團／小泉の跡取り息子でなければならなかった。

田鶴

私はそんな家に、跡取り長男として生まれた五士郎の息子である。思いを込めて士郎と名付けられたかと思うかもしれないが、実際はそうではない。

私が母の実家である藤竹医院(京都市左京区下鴨で伯父が開業していた)で生まれたとき、大阪に勤務していた父は直ぐに会いに来たりしていない。電話で母方祖父(藤竹信之)と話した父は、「名前は任せますから、付けておいてください」と言ったと聞く。

母方祖父も、「五士郎君の息子だから、士郎君でよからう」ということで、私は父に丸かぶりの名前になった。

そんな父を育てた祖母・田鶴は、かなり活発な賢い女性だった。初孫男子の私は、祖母に連れられて、五大力さん、狸谷のお不動さん、木下大サーカス、キグレサーカス・・・と、記憶にあるのはこんなところだが、お祭りや興行にあちこち連れて行って貰った。私には妹が居るのだが、祖母は私だけを連れ歩いたような記憶がある。

祖母は呉服屋から依頼されて縫い上げるような裁縫技術を持っており、ほぼ専業主婦の時代に、自分の稼ぎのあるお婆さんだった。

この祖母が「團の家は士族の出やから・・・」が口癖だった。父・五士郎もそれを浴び続けたのであろう、時々そう口にすることがあった。そんな時はたいい、先祖伝来と称する刀や骨董品を虫干しのように手入れしている時だった。

私はこの祖母、父が口にする「團の家は士族の出だ」という話が、とにかくうっとうしかった。

身分などという意味もない根拠に、己の存在価値を一段上位において語るメンタリティが考えられなかった。

これが私に我が家のファミリーヒストリーへの無関心を強化した。そして逆に家の中では、ほぼ発言は封じられていたように物静かで穏やかだ

った留吉が気になっていた。

私が中学時代に祖母が、高校時代に祖父は亡くなった。今になって思うことだが、祖父母の関係はずっと女主人と召使いだった。当時としては高学歴で身分も士族出の祖母と、百姓の四男で丁稚上がりの祖父は、死ぬまでそうだった気がする。

漫画／留吉の丁稚時代

自転車にまつわる、古い話だ。



明治時代、運送屋で丁稚奉公をしていた私の祖父。



ある日、新しい物好きの来客が自転車で店に来ていた。



言いつけられた
用を果たし、
報告した。



するとその
迅速なことに、
主人が驚いた。



来客は
「便利なのだ」
と強調した。



これがきっかけで、
お店に自転車
が導入されることになった。



これは祖父・留吉から聞いた話の中で一番好きなものだ。なんとなく、まだ文明開化っぽい香りのするエピソードだと思う。

客が必要な物を
持参し忘れた
というので、
ひとつ走り
取りに行つてこいと
主人に命じられた。



その時、「自転車
を拝借
してもいい
でしょうか？」
と、おそろおそろ尋ねた。



「おまえ、自転車
なんぞに
乗れるのか？」



「町外れにできた
自転車練習場
に通いました」
と応えると、
来客が
「使つて
良いよ！」
と言つてくれた。



五士郎の応召と強制疎開

昭和十年代、運送業も順調な時代、両親には自慢の息子だったようで、姉・ユカ子も含め、一家で五士郎を持ち上げていた。

父・五士郎は元総理大臣・大平正芳が同窓だというのが自慢だった。学生時代、五士郎は当時の巡査の月給より多い仕送りをして貰って、高松高商(現・香川大学経済学部)で青春を謳歌していたようだ。

しかし日本は又、戦争の渦中に国民を巻き込んでいく。会社勤めをしていた五士郎に召集令状が届いたのは昭和十九年。

私の両親の婚姻届は昭和19年4月27日に受け付けられているが、父の兵籍簿によると応召は昭和19年4月20日。博多出港は5月8日とある。

昔、役所への届けはルーズなところがあったと聞かすが、召集令状が届いて急いで結婚したのか、新婚生活を浜甲子園で過ごしたとか聞いた気もするので、確かなことは分からない。

そして運送業を営んでいた浜大津地域全体が強制疎開対象となり、五日以内に明け渡すよう指示された。空襲による火災予防のため、浜大津港周辺一帯は取り壊されたのである。

母は京都の藤竹家から嫁に来たとき、戦時中であつたにもかかわらず、結婚支度の一つにピアノを持たせて貰って来たらしい。だがそれはこの強制疎開によって失われてしまう。

昔の人だが「エリーゼのために」、「乙女の祈り」くらいのピアノ曲を弾ける人だった。そこで母は、六十歳も過ぎてから父に、戦争中に処分してしまった嫁入り支度のピアノを買い戻して欲しいといった。晩年はそのワインレッドのピアノを弾くのを楽しみにしていた。

強制疎開後、團一家(留吉、田鶴、久子)は檀家総代を務めていたことのある青龍寺に身を寄せて、敗戦を迎える。そして五士郎の復員を待つ

のだが、安否不明のまま一年が経つ。

結婚直ぐに夫が召集されてしまい、義父母と暮らしていた母は、田鶴から、「生死不明の夫を待っているより、まだ子どももないのだし、実家に帰って、新たに嫁に行ったらどうか」と言われたそうだ。

もしそんなことになっていたら、戦後生まれの私は当然生まれておらず、ファミリーヒストリーは、全く違ったものになっていたことになる。